

今週の為替相場見通し(2022年1月4日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		114.33 ~ 115.20	115.12	114.25 ~ 116.00
ユーロ	(ドル)		1.1274 ~ 1.1386	1.1369	1.1250 ~ 1.1400
(1ユーロ=)	(円)		129.44 ~ 131.00	130.87	130.00 ~ 131.50
英ポンド	(ドル)		1.3391 ~ 1.3550	1.3524	1.3400 ~ 1.3550
(1英ポンド=)	(円)	*	153.12 ~ 156.02	155.74	154.00 ~ 156.00
豪ドル	(ドル)		0.7206 ~ 0.7277	0.7269	0.7080 ~ 0.7280
(1豪ドル=)	(円)	*	82.57 ~ 83.76	83.68	81.80 ~ 84.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1)今週の予想レンジ: 114.25 ~ 116.00 円

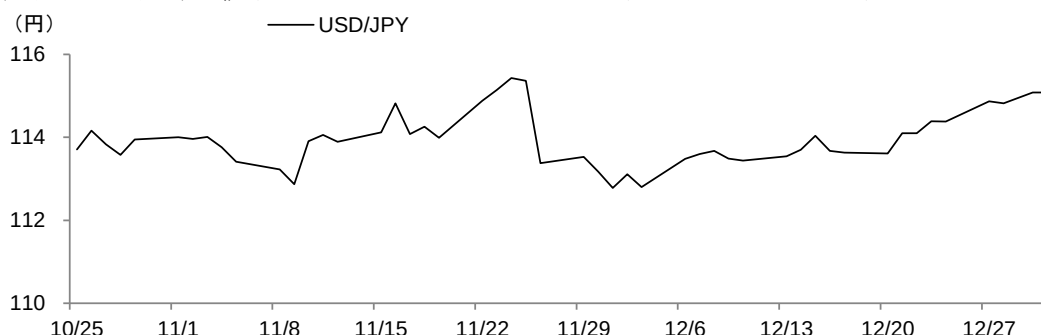
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は一時115円台まで上昇。週初27日はアジアではオーストラリアや香港、欧州では英国等が祝日で休場のため市場参加者が少なく、特段新規材料も見当たらなかったが、ドル買い円売りが進行し、114.74円まで上昇。NY時間も流れが継続し、米株の上げ幅拡大とともにドル/円もじりじりと上値を伸ばす。一時114.91円まで上昇するが、節目の115円手前で米長期金利の低下が重しとなった。28日も115円の上値が意識され、114.80円を挟んだ揉み合い推移。29日、クリスマス休暇明けで市場参加者が戻ってきた欧州時間では円売り優勢の展開となり、11月26日以来の115円台を回復。年末で薄商いの中、115.04円をつけるが、その後ドルが全面的に売られ、114.67円まで下落するも、再び円売り優勢となり、114.98円まで買い戻された。その後、何度か115円をタッチする場面はあったが、明確に上抜けることは出来ず、結局、114.98円でクローズ。30日、米新規失業保険申請件数と失業保険継続受給者数が発表され、予想以上の改善を見せるも、市場は年末ムードで反応薄。その後、対ユーロのドル買いがドル/円にも波及し、海外時間高値の115.20円まで上昇するも、この水準で伸び悩んだ。31日、日本時間は大晦日で休場となる中、海外市場のドル/円は115円台前半で小動き。年末のポジション調整中心の動きとなり、ドルは全面的に売られるが、クロス/円が堅調に推移していることから、ドル円は115円台前半中心で揉み合い。前日高値の115.20円を再びつける場面もあったが、直ぐに反落。ドル/円は動意乏しい値動きが続き、115.12円で年越え。3日も底堅い推移で115.30円付近まで上昇。一時115円割れまで下落する場面もあったが、再び115.30円付近まで戻して同水準を推移。

今週のドル/円相場はFRBの高官発言や週末に米雇用統計が控える中、週央は115円を中心に揉み合いの展開となり、その後は発言、経済指標次第と考えるが、概ね底堅い推移を予想する。テクニカル指標を見ても、日足の一目均衡表の雲の上限は昨年末切り上げっており、ドル/円の上昇をサポートする形となっており、新年の1月も114円に雲の上限が構えている。月末にかけて雲が薄く、また捻じれも見られるため警戒はしておきたいが、雲の上限は113円台後半を維持しており、新型コロナウイルスの急感染などの相場急変時に下に抜けなければ、底堅い推移をすると考えている。今週の経済指標は4日(火)米12月製造業景況指数、5日(水)米12月ADP雇用統計、FOMC議事要旨、6日(木)米11月貿易収支、米12月ISM非製造業景況指数、7日(金)米12月雇用統計が控えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/27 ~ 12/31)の値動き: 安値 114.33 円 高値 115.20 円 終値 115.12 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.1250 ~ 1.1400 130.00 ~ 131.50 円

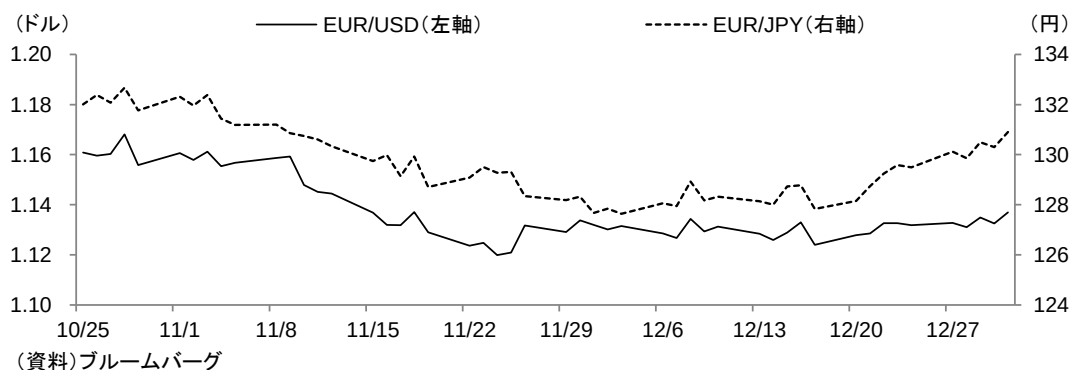
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

12/27週のユーロ/ドル相場は1.13前半を中心に、低流動性下でフローに振られる展開となった。クリスマス明けで休日国が多い週初27日、市場参加者は限定的、かつ新規材料にも乏しい中でユーロ/ドルは1.13台前半での小動きに終始した。翌28日、海外時間に入り欧州通貨や資源国通貨に対するドル買いが強まり、ユーロ/ドルは節目の1.13を割り込む局面も見られたが程なく1.13台前半に小反発。29日は海外時間序盤に明確な材料はない中、週安値である1.1274まで下落する局面も見られたが、その後は欧州通貨や資源国通貨に対するドル売りから一本調子で戻す展開となり、1.13台後半まで上昇した。30日は東京序盤からじり安の展開となり、一時1.1300まで下落。しかし、同水準でのサポートが確認されると、1.13台半ばまで反発。その後再び1.13割れ水準まで下落するも滞空時間は短く、再度1.13台前半に戻す展開。年末31日は米国時間にかけてユーロのショートカバーが先行。年末で市場参加者が少なく、流動性が乏しい中でユーロ/ドルは週高値の1.1386まで上昇し、1.13台後半で超年した。なお、年初1/3、序盤は1.13台半ばから後半での推移となったが、海外時間に米金利上昇を受けたドル買いから1.1280まで下落。しかし、29日安値を前に下げ止まると1.13手前まで小反発し、1.1299レベルでクローズ。

今週のユーロ/ドル相場は1.13付近でのみみあいを予想。年末年始の為替市場は突発的なイベントもなく比較的落ち着いた相場だった印象。ユーロ/ドルにおいてはフロー主導の相場付きとなり1%程度の変動はしていたが、薄い流動性下ということもあり大きな方向感が出てこなかった。新年となり少しずつ市場参加者が戻る中で相場は厚みを増す。また今週は米経済指標の発表は予定されているが欧州発のトピックスは予定されておらず、年末特有の決算に伴う資金調整の影響も剥落した中で、基本的には1.13付近でのみみあいとなるのではないかと。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/27 ~ 12/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.1274 高値 1.1386 終値 1.1369
(対円) 安値 129.44 高値 131.00 終値 130.87



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3400 ~ 1.3550 154.00 ~ 156.00 円

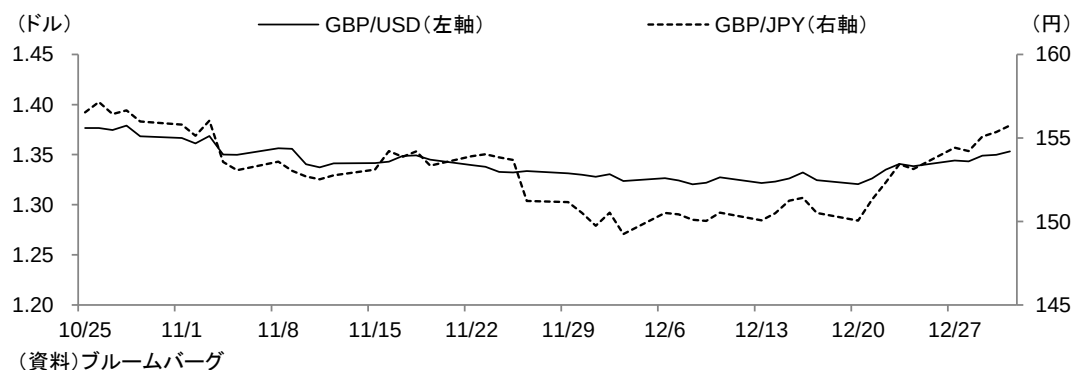
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、予想に反し、全面高。英市場は28日まで4連休で営業日は3日間だけ、しかも次の週末も3連休(1~3日)で、市場参加者の多くが不在となった。28日までは堅調気味の膠着にとどまっていたポンドは、連休明けの29日、対ドル、対円で一段水準を切り上げた。同日発表されたネーションワイドの12月住宅価格指数は前年比+10.4%と市場予想(同+9.4%)を明確に上回り、現地では、2021年通年の住宅価格上昇率が15年ぶりの強い伸びを示したことが話題になったものの、同指数発表からポンド上昇までには数時間以上の時差があり、ポンドが同指数を材料視して買い上げられたとは考え難かった。ポンド堅調の要因を敢えて挙げるなら、12月16日の予想外の利上げ(0.10→0.25%)以来、「先進国で最も利上げに積極的な中銀」との位置付けを英中銀が得たことが、考えられたのではないかと。更に翌30日、対ユーロで年初来高値(11月22日の0.8380)と並ぶ水準までポンドは上昇、翌31日には一時0.83695まで高値を切り上げたのには意外感があった。同日中にユーロが全面高に転じ、ポンドも対ユーロでは明確に反落した。

今週の英ポンド相場は、引き続き動意に乏しい環境で、軟調推移を予想。ポンド軟調を見込むのは、31日に対ユーロで見せた値動きを不自然に感じるから。上述の通り、対ユーロで、ポンドは年の最終営業日に年初来高値を更新したものの、その値動きを裏付けるような特段の材料があったとは思えなかった。その日のうちにユーロが全面高に転じた理由も、無理矢理探すとしたら、オーストリア中銀ホルツマン総裁やオランダ中銀クノット総裁など欧州中銀首脳が、相次いで早期利上げに積極的と読める発言をしたことを挙げることはできただろうが、いずれも30日の欧州時間中に聞かれた発言だった。また、英中銀利上げ観測がポンドを押し上げるというのはいささかありそうだが、この間、英金利先物の値動きには、英中銀追加利上げ観測の織り込みが進む様子は一切読み取れなかった(むしろ小幅に後退していた)。こうした値動きが物語るのは、ひとつには市場参加者の動意が乏しかったこと(欧州中銀首脳の発言を言い訳にユーロを買い上げるのに24時間も時差が生じるのは、通常の相場では考え難い)。もうひとつは、敢えてポンドの新値を付けたい思惑が存在し、実際に新値がついた時点でポンドを買い上げる動意も解消された可能性(典型的には、ポンド買い方向の損切り注文が存在し、執行された可能性)。流動性が低下した局面で無理矢理ポンドを買い上げたい思惑があってそれがポンド全面高を演出し、目的が達成されたところでポンドが急反落したのであれば、目先、無理矢理押し上げられたポンドの調整安を中心に見込むのは、テクニカルには過ぎるものの、あながち見当外れな見通しとも言えないのではないかと。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/27 ~ 12/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.3391 高値 1.3550 終値 1.3524
(対円) 安値 153.12 高値 156.02 終値 155.74



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 0.7080 ~ 0.7280 81.80 ~ 84.00 円

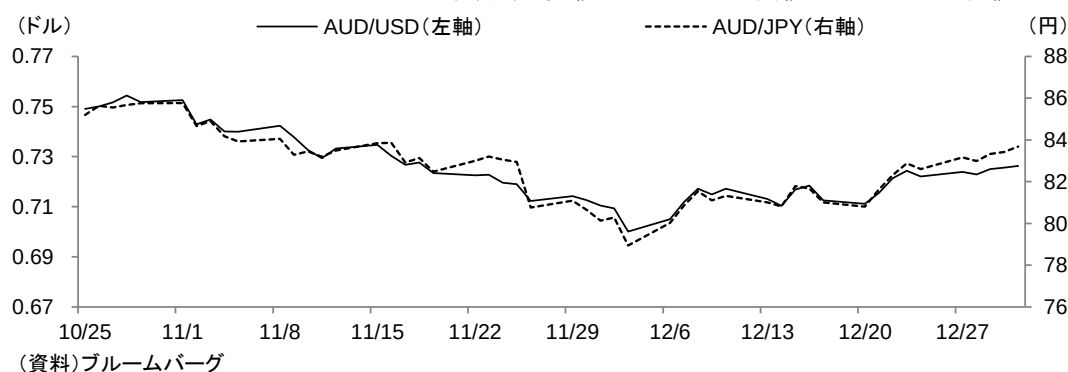
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場はリスク選好の流れから上昇するも、年明け上昇分を吐き出す展開となった。12月27日、シドニー市場が休場の中、豪ドルは0.72ドル台前半、豪ドル/円は82円台後半でオープン。欧州時間に銅価格が下落する場面では豪ドルは一時0.7206ドルと週安値へ軟化する場面があったが、米国時間は銅価格の大幅反発と共に0.72ドル台半ばへ持ち直した。クリスマス明けの米国市場ではオミクロン株への楽観や好調な年末商戦を背景に株高が進行。リスク選好ムードが広がると豪ドル/円の追い風となった。29日は豪州の新型コロナウイルスの新規感染者が過去最多の約1万6500人に急増すると一時的に豪ドル売りが持ち込まれたものの、政府はロックダウン再導入に否定的な姿勢を崩さず、反発。30日に発表された米新規失業保険申請件数が予想以上に低下し、昨年3月以来の低水準となる等リスク選好の流れが継続すると、31日に豪ドルは0.7277ドル、豪ドル/円は83.80円台と11月中旬以来の水準まで上昇。ただし、年明けの1月3日は世界経済への楽観持続から米利上げ織り込みが一段と強まると、ドル全面高の展開となった。豪ドルは大きく値を下げ、4日のシドニー市場で豪ドルは0.71ドル台、豪ドル/円は82円台まで下落している。

今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。昨年末、モリソン豪首相は感染者の急増で検査が追い付かない状況を受け、新型コロナウイルス感染検査に関する規定改正を発表。濃厚接触者の定義は感染者の同居人となり、検査もより短時間で結果が判る抗原検査を自宅で実施するよう促した。今後の検査体制の逼迫・感染者数の推移にどのような影響を与えるか見守る必要があるが、豪州での新規感染者数が過去最多を記録する中、今後の経済活動への影響が懸念されている。豪州では飲食店の休業などが報道されており、他先進国とオミクロン株への反応が異なる。感染拡大を受け消費の落ち込みが確認されると、オーストラリア準備銀行の楽観的な景気見通しや債券買い入れ終了時期をめぐる判断に影響する可能性がある。今週は豪州では主要な経済指標の発表は予定されていない。一方で、米国では7日(金)に米12月雇用統計が発表される。米国の雇用市場の回復が確認され、米利上げ観測が一層強まることとなると米豪金利差が縮小し、豪ドルは上値重く推移することとなるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/27 ~ 12/31)の値動き: (対ドル) 安値 0.7206 高値 0.7277 終値 0.7269
(対円) 安値 82.57 高値 83.76 終値 83.68



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。